とちぎの「茶の湯」　覚え書き
－長沼城跡出土天目碗小片の検討－

篠原浩恵（しのはらひろえ）

はじめに
1　長沼城跡の概要
2　長沼城跡出土天目碗小片
3　天目碗出土の背景
結語

長沼城跡から出土する３片の天目碗片について、長沼氏と関わりのある宗光寺に由縁する可能性を予察する。長沼氏の歴史的背景を鑑みるならば、京屋敷からもたらされた所謂「会所・書院の茶」に関わる遺物である可能性が第一に思い浮かぶ。しかし、時期や出土状況からは、寺院の茶に組する遺物である可能性を否定しきれない。あくまで予察ではあるが、本稿が長沼氏関係文書群の再検討が進む中で、「とちぎの茶の湯」が明らかとなる糸口になることを期して記す。

はじめに

粉状にした茶葉[1]を撹拌して飲する点茶法は宋代に起こり、大陸への留学僧の帰国によって日本にもたらされたと考えられている。天目碗は、この「茶」に伴う「茶器」であることが明確な道具である。顕密寺院[2]を中心に広がった点茶法による喫茶の風習は「僧院の茶」とも呼ばれる。室町時代には所謂「会所の茶」・「書院の茶」となり、政治儀礼にも組み込まれることが明らかとなっている。これまで、発掘調査で出土する碗などの喫茶道具とみられる遺物については、遺物の年代観から、喫茶の風習の時代性を傍証する資料となることは多いが、遺物自体が何を意味するかについての考証は漠然としていたように思われる。本稿においては、遺物の示す「茶」を念頭に検討したい。

1　長沼城跡の概要

長沼城跡は、真岡市長沼地内に所在する古代の集落および中・近世の城館である長沼城関連遺跡である。真岡市街の南西約 11.0㎞、鬼怒川の東岸の微高地に位置する。平成 20（2008）年度に発掘調査を行い、平成 22（2010）年度に報告書が刊行されている（池田 2011）。当該調査によっては、長沼城跡推定範囲の北辺の一部と谷を隔てた微高地の一部の様相が確認されている。本稿で扱う天目碗[3]３片は、長沼城とは谷を隔てた異なる微高地上の調査区（池田 2011 に従い A 区と呼称する）から出土する。

長沼城は 12 世紀末葉に長沼宗政によって築かれたとされる。長沼氏は有力御家人小山氏から分立した一族である。14 世紀中葉には長沼氏本宗は陸奥国に拠点を移すが、14 世紀末様には長沼庄の所領を回復している。発掘調査からは、14 世紀後半～ 15 世紀前半に見られる出土遺物の空白期が、長沼氏本宗の長沼庄不在期にあたるとの所見が得られている。15 世紀中葉になると、長沼氏は一族の分裂により終焉を迎える。

天目碗片が出土する微高地上には、本遺跡の南南西約 1.0㎞に、中世以来、関東天台三談所として著名な宗光寺がある。寺伝には、慈覚大師円仁が創建し、長沼氏初代宗政が新薬師堂を建立したとある。長沼氏が長沼庄を離れた後、天正年間に堂塔は破壊・没収されたが、17 世紀に住持となった天海法印により復興が

なり、談林僧正寺の格式を有した。当該調査では、この時期の奢侈的な流行品が A 区から出土する背景を宗光寺との関連と捉えており、その関連は中世に遡る可能性が大きいとの指摘[4]がある。

2　長沼城跡出土天目碗小片

長沼城とは谷を隔てた微高地から出土する天目碗小片は、比較的近接した遺構から出土する。

図 1 はロクロ成形の口縁部小片である。微高地東寄りの溝状遺構（SD-50) から出土する。内面～外面中位に鉄釉を施す。古瀬戸後期の小型の天目碗とみられる。推定口径約 8.0㎝。

図 2 はロクロ成形の底部片である。SD-50 に近接する土坑（SK-194・195）から出土する。底部外面を削り出し高台を作出する。外面は素地、内面は鉄釉を施す。底径約 5.1㎝。古瀬戸Ⅱ期。

図 3 はロクロ成形の底部小片である。SD-50 に近接する土坑（SK-187）から出土する。東西 2 間・南北 3 間の掘立柱建物跡（東西約 5.0m 前後・南北約 5.5m）の北辺中央の柱穴の可能性がある。外面に銹釉を薄く施し、内面に鉄釉を施す。推定底径約 5.0㎝。古瀬戸Ⅱ～Ⅲ期。

3 片とも小片であるが、14 世紀末葉～ 15 世紀代の古瀬戸と考えられる。14 世紀後半から 15 世紀にかけては長沼氏の長沼庄不在時期であり、所領回復後の 15 世紀代に遺跡内に持ち込まれた遺物との調査所見がある。

3　天目碗出土の背景

本調査区の天目碗の時期となる、14 世紀末葉～ 15 世紀の喫茶事情は、南北朝時代に大流行した「闘茶」が富裕層の社交のための遊芸に変化する時期にあたる。14 世紀末葉には、茶葉を格付けする「本茶」に、栂尾茶と並び宇治茶があてられ[5]、文明十八（1486）年には、茶室の始まりともされる遍照寺（銀閣）東求堂同仁斎が足利義政によって建立される。足利義政の茶道具の揃えを記したとされる『君台観左右帳記』[6]には、台に載った建盞・天目碗の形状の器物が描かれている。所謂「会所の茶」、「書院の茶」の時代である。鎌倉や京の屋敷から情報や文物が齎されたであろう長沼氏であれば、本領の主権回復後といえども、喫茶を愉しんでいたであろうことは容易に推測される。しかし、看過できないのは、出土遺物が天目碗であり、出土位置が宗光寺に関連する地所である点である。

宗光寺は中世以来の天台系の寺院と考えられる。喫茶の風習は鎌倉時代に天台宗をはじめとする顕密寺院

を中心に広まり、禅宗寺院に波及することが定説化しつつある。また、 天目碗は鎌倉時代の所謂「僧院の茶」の器物である。室町時代においては、顕密寺院であることを喫茶の条件とするには喫茶の風習の広がりは大きいが、当時の茶葉の生産状況や入手経路を考えるならば、顕密寺院は喫茶の機会に恵まれた環境であったと判断される。寺院を中心に広まった喫茶の風習は、南北朝以降には寺院の信者に取り込まれた地方武士層へ、戦国時代頃には地方武士層から所領である集落へ、「茶」の存在を広めていく。その中核であるのは、葬祭儀礼に組み込まれた「茶」の供献と考えられている。「喫茶」以外に、寺院における「葬祭儀礼の祭具」としての「茶」のあり方が考えられるのである。

歴史的な動向や遺物の年代観、出土するA区が宗光寺に関連する地所であるとの指摘から、本資料3片が宗光寺に纏わる茶道具である可能性を推定しておきたい。茶道具の使用方法については、大きく、①寺院での喫茶、②葬祭儀礼の祭具が想定される。②葬祭儀礼の祭具については、年代的に地方武士層に関連する可能性が高いと考えられるが、宗光寺が天台系の寺院であることを鑑み、地方武士層の所領である村落における「如法教信仰」(7) に関わる祭具である可能性も考えておきたい。なお、「如法教信仰」との関連については、別稿に譲ることとしたい。

結語

本項では、A区で出土する天目碗片について、寺院に関連する可能性を予察したが、遺構配置など、遺跡としての検討は不十分である。長沼氏関係文書群の検討成果などとあわせ、今後の検討を深めたい。

現代の「茶の湯」に通じる、「芸能」の茶の湯の成立は16世紀中頃と考えられている。千利休の弟子である山上宗二が、自ら記した茶道具の秘伝書『山上宗二記』を託した数少ない一人が、長沼氏が所領を移した皆川庄（現在の栃木市皆川）の後代である皆川広照であることは歴史の妙といえるかもしれない。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、池田敏宏・篠原祐一・篠原咲陽各氏より多くのご助言・ご指導を賜りました。末筆ではありますが、心から感謝申し上げます。

[註]

（1）固形茶（団茶）を削って粉末にしたもの、茶葉を粉末にしたものが知られる。

（2）顕密仏教を修めることのできる顕密八宗（南都六宗・天台宗・真言宗）。

（3）中世においては、同様の形状であるものの、建盞（窯変・油滴など）と天目碗（灰被など）とは明確に区別されていたことが明らかとなっている。

（4）報告書を執筆した池田敏宏氏のご教示による。

（5）『十問最秘抄』永徳三（1383）年成立の歌論集。

（6）表に出ない奥向きの茶道具揃えとされる。

（7）近江や山城の天台系の集落で盛んに行われたとの類例がある。

[参考文献]

池田敏宏　2011『長沼城跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第335集 栃木県教育委員会・（公財）とちぎ生涯学習文化財団